

第八章 鎌倉一大江広元

「では、盛長、郷姫を大江広元の所に案内してくれ」

頼朝は、盛長にそう命ずると政子と共に部屋を出て行った。

郷子が、比企尼に挨拶して、盛長の後を付いて行くと、彼が訊いた。

「驚いたか」

「はい、驚きました」

「あれは何時もの事だ。気にしなくていい」

「蛭が小島で頼朝さまと政子さまの間を取り持ったのは、伯父さまだと聞いています」

「その通りだが、実は裏がある。頼朝さまは伊東氏の八重との事件があつてから、今度は北条氏の娘に狙いをつけた。八重とのことで懲りたので、長女はどうもまずい、次女にしたいと言ひ出した。それで、自分で恋文を書いて次女のもとに届けてくれと俺に頼んできた。俺も、かねてから偵察していたので、長女も次女も知っていたが、どう見ても長女の方が美人で賢そうだ。それで、宛名を勝手に書き換えて、政子さまに恋文を渡した。政子さまも、有名な流人である頼朝さまのことは、何度も見かけていて憎からず思っていたらしい。すぐに返事があつて、屋敷の離れで真夜中に待ち合わせをした。真っ暗だから、相手のことは全く見えない。帰ってきた頼朝さまに首尾を聞いたら、話も肌も申し分なく合うという。それから、相手が判らないまま、二人で何度も逢引しているうちにすっかり意気投合してしまった。頼朝さまは、相手が次女に違いないと確信していたのよ。それがどうしてばれたかという、ある時、二人で朝まで寝過ごしてしまい、頼朝さまは、朝日のなかで自分が抱いているのが政子さまだと判って仰天したのさ。だが人違いだったことは黙っていた。俺が謀ったことに気がついて頼朝さまが怒るかと思っていたがそんなことはなかった。政子さまが気に入っていたからな。だから後で人違いの話は、政子さまには絶対に悟られるなど恐れ顔で脅かされてしまったよ」

郷子は、頼朝の品格のある顔を思い浮かべた。

「頼朝さまは、とても知的で理性のある方のように見受けられます」

「そう、物事をすべて理知で考え、情が介在することを嫌うな」

「しかし、女遊びはお好きなのですか」

「ははは、それとこれとは別物よ。色事だけは、知性や理性ではどうにもならんらしい。だから、政子さまがいくら嫉妬しても止まらないのさ」

「義経さまのことも言うておられましたか」

「どちらも、武士貴族である義朝さまの種だから、兄弟よく似ているのだろう。おまえには辛い事だが、こうしたことは、嫁に行った後で知るよりも、予め知っておいたほうが良い。頼朝さまと政子さまは、あれで結構うまくいっているのだから。しかし、嫉妬だけはするな。女の嫉妬ほど醜いものはないからな」

郷子は、男の虫のよい論理に呆れてしまうが、何も言わなかった。

御所の中でも比較的大きな建物に入ると部屋が幾つも並んでいる。その内間注所と書かれた部屋の前で立ち止まると、盛長が大きな声を出した。

「三善殿、お連れしたぞ」

すると、比企で会った三善康信が出てきて、郷子を見ると声をかけた。

「先日は、どうも」

「私事のために比企まで御足労頂き有り難うございました」

「では、よろしく頼んだぞ」

安達盛長はそこから引き返していった。

三善は、部屋に郷子を招き入れた。部屋には、紙縫りで綴じられた書類が山のように積み重ね、数人の武士がしきりと文机で書を読んだり書き物をしたりしている。なんとなく、暗くかび臭い感じがする。

「ここは、各地から申し立てられた訴訟事案を頼朝さまに進達する所だ。その内訴訟案件を本格的に取り扱うことになる。私はここで執事（長官）をしている」

三善は、誇らしそうだ。

それから、三善は郷子を連れてひととき大きな部屋に案内した。

「ここが、公文所だ。政務一般を取り扱っている。大江広元殿は、ここの別当（長官）をされている。比企でも話したが私とは都の外記局で共に働いていたころからの親友だ。大江家は、代々学者の家柄で、なかでも大江匡房殿は、東宮学士を勤め、正二位権中納言まで出世された貴族の名家だ。だが、大江広元殿は、都で出世しようなどの野心は全く持っておらず、朝臣としての役職を投げ打って、まだ、海のものとも山のものとも判らない鎌倉幕府の創設に参加されている。いまでは、頼朝さまの懐刀として、ほとんど全ての政務について意見を求められている」

三善は、親友といいながら大江広元を尊敬しているようだ。

さらに奥の一段と立派な部屋に入ると、大きな書机の後に座って書きものをしていた武士が人の気配を感じて目を上げた。

その武士は割りと小柄だが、色黒で精悍な顔立ちに、好奇心に満ちた大きな眼と堅く結ばれた口、小さく角ばった顎に、豊かな知性と意志の強さを感じさせる。

「大江殿、こちらが義経の正室となる郷姫でござる」

三善が紹介する。郷子が、大江の書机の前に正座して丁寧に挨拶する。

「郷子でございます」

「大江です」

大江が、その鋭い眼光にすこし笑みを見せると、突然堅苦しい顔に無邪気な表情が現われて、郷子を驚かした。

（この方は、学問一筋の理想家肌の人なのだ）と郷子は思う。

大江は、書机の上の書類を机の横に整理して積み上げると話し出した。

「頼朝さまから、貴女が義経殿の正室になるにあたって、鎌倉政権の現状と、幕府創設の

ための今後の指針を貴女に良く御理解いただき、義経殿を影ながら導いていただきたいとの要望がありましたので、こうしてお話しするわけです。

ご存知の通り、いま京の都は源氏が制圧し、義経殿が警護に当たっています。

しかし、平家は屋島に集結し、次第に勢力を回復しつつあり、首都奪還の機会を虎視眈々と狙っています。実際のところ、現状ではいつ何時、源氏と平家の立場が逆転してもおかしくない情勢にあります。従って、我々も頼朝さまの旗の下にさらなる勢力を結集することが急務になっています。まだ、源氏に付くか平家に付くか決めていない豪族が沢山居るのです。しかも、今は源氏方でも、もし平家が有利になる気配があれば、直ぐに寝返る豪族も多いのです。こうした中で、多くの豪族を味方に曳き付ける要素は何だと思われませんか」

「さあ、それは、元々源氏の血筋だとか、平家の血筋だとかというのではないでしょうか」

「全く無いわけではありませんが、東国武士団の豪族のなかに平家の流れを汲むものも多数いるのです。血筋というものが敵味方の動悸づけとなっていない例として、保元の乱を取り上げてみましょう。

天皇家では、兄弟が争いました。摂関家では、やはり兄弟が、平家では伯父と甥が、源氏では父と子が争いました。そして、勝った方が血の繋がった相手を殺すことになりました。この争いは、どちらが政治的な主導権をとるかの権力闘争です。その本質は、勝利者が権力を得て旨い汁を吸えるからです。つまり、血の繋がりは個人利益が優先されるのです。

さて、豪族の場合も、源氏と平家のどちらに味方したほうが、自分の個人的利益に繋がるかですが、負け犬に付けば、自分の領地を失うことは明らかです。勝ち馬に乗れば、最低でも領地を失わずに済みますし、成果を上げれば恩賞を受けて領地を拡大することができます。では、源氏にも平家にも付かないで中立を表明すればいいと考えるかもしれませんが、それも出来ません。

奥州の藤原氏のように富裕な大豪族の場合は別として、中小豪族の場合には、他の豪族が得た恩賞の対象になって、取られてしまう可能性があるからです。

従って、中小豪族にとって、源氏に付くか平家に付くかは、生死を分ける決断になるわけです。

その生死を分ける決断の判断基準となるのは、まず、どちらが優勢かです。誰でも勝ち馬に乗りたいたいです。武士が死に物狂いで戦う根拠は、勝ち馬に乗って成果を得たいからです。次に、勝った場合に、自分の戦果を正しく評価して貰えるかどうかです。そこで、武士は、まず、先陣を争います。大声で、我こそは、何処の何某と名乗るのはそのためです。戦果を記録してもらいたいために、敵よりむしろ味方に対して知らせようとしているのです。

では、戦果を上げて、領地を貰う場合に、誰がそれを決定するかですが、いまの律令制度の下では、土地は原則公地ですから、それが出来るのは、朝廷ということになります。朝

延に申請書を出して認可して貰わなくてはなりません。平清盛は、朝廷に圧力をかけて、平家の一族が領地を拡大するよう画策し成功しました。そのために、平家は多くの豪族から反感を買いました。従って、我々は、この方式を根本から変えなければならないと考えています」

大江は、そこで一息入れた。饒舌でいくらでも話しそうだった。

「そのためには、朝廷に各豪族の所領の申請をして認可してもらうのではなく、頼朝さまが各豪族の所領を正しい評価の下に決定し、それを朝廷に通知すればよい土地支配権を有すればいいのです。このような土地支配権を頼朝さまが朝廷から認めてもらえば、中小豪族が頼朝さまに従うことは間違いありません。しかし、それを朝廷に認めさせることは、容易なことではありません。実際、頼朝さまには、かつて先祖が武蔵国を支配した源氏の嫡流という素性のほかには何も無いのです。豪族のように領地も自前の家人郎党もいません。わずかに、妻の政子さまの実家の北条家が頼みの綱ですが、それも他を圧倒するほど力のある豪族ではありません。では、どうすればよいか。我々は知恵を絞りました。そして、それを頼朝さまに伝えました。以仁王の令旨を最大限利用しなさいと」

大江は、そう言うのと嬉しそうにまた無邪気な表情をした。

（きっと、自分が立てた知略が上首尾に終わったのだろう）と郷子は思う。

「以仁王は、後白河法皇の第三皇子でしたが、平清盛の妻時子の妹滋子（建春門院）が法皇の第七皇子（後の高倉天皇）を生んだため、親王宣下も受けられず皇位継承の可能性も消滅しました。御存知の通り、その後、清盛が娘の徳子（後の建礼門院）を入内させ、子供（後の安徳天皇）が生まれると僅か二歳で即位させました。以仁王は、このような清盛の横暴と、さらに、経済基盤である自分の荘園も没収されたことで、ついに平家追討の令旨を諸国の源氏に送ったのです。この令旨を受け取った頼朝さまは、安達盛長殿に命じて、東国の各豪族を回って挙兵を募ったのですが、我々は、その際、次のように吹聴すべきと提案しました。

[令旨には、頼朝さまが平家に勝ったならば、頼朝さまが各豪族の所領を決定する土地支配権を朝廷から得ることができると記載してある]

もちろんこれは嘘です。以仁王は、朝廷に何の権限も無いし、この平家追討の計画が事前に漏れて殺されてしまったのですから。ただ、平家の横暴で、自分の所領の支配に不安を抱えていた豪族の挙兵にはかなりの効果がありました」

大江は、満足そうだった。隣に控えている三善康信もしきりに頷く。

我々というのは、この二人のことに相違ない。

「しかし、危ないこともありました。以仁王の令旨が発覚して、平家が東国に源氏追討軍をだすことが判って、私が伊豆の頼朝さまにすぐに逃げるように連絡したのです」

三善が口を挟んだ。

「しかし、頼朝さまは、逆に腹を決めて挙兵することにしたのですからね。

まあ、初戦の石橋山の戦いには負けましたけれども、その後、平家内部の主導権争いや、

飢饉のために兵糧が調達できないことなどで大規模な追討軍の派遣が大幅に遅れたことも幸いしました」

大江が相槌を打つ。二人は、楽しそうだ。

「先ほど話した領地の拡大などの恩賞のほかに人の意欲や情熱を誘引する要因は何だと思えますか」

大江が郷子に訊いた。

「愛情でしょうか」

「うーん、女性らしい回答ですね。しかし、男にとっては、官位なのです。名誉欲です。この歴史は古く、聖徳太子が人材の登用と朝廷の権威を高めるために冠位十二階の制度を定めたのです。冠位一位から十二位まで決め、その冠の色まで違えたのです。上下関係をはっきりさせ朝廷の上意下達を明確にするためです。

その後、律令制の基で、幾多の変遷がありましたが、現在では、正一位、従一位、正二位、従二位など多くの位階があり、その位階に順ずる形で太政大臣、左大臣、右大臣、大納言、中納言など多くの官職があります。

朝廷では、上級官吏は、下級官吏を支配し、収入も多いのですから、官吏は、一つでも上の官位に上がりたくて、忠誠を誓い、熱心に働くわけです。

朝廷は、官位を与える権限を通して、官僚機構を支配しているといってもいいくらいです。しかし、官位の与え方の適不適が多くの紛争を引き起こしました。

例えば、保元の乱で後白河天皇側についた平清盛と源義朝に戦勝の論功があったのですが、この論功行賞を天皇側近の権力者信西（藤原通憲）が取り仕切ったのです。そして、清盛を播磨守・太宰大貳に任じ、義朝を佐馬頭としました。清盛は播磨国の領主になって収入があるのに、義朝は単に宮中の軍馬を管理するだけの役目です。結局この論功行賞の差の不満が、平治の乱で清盛と義朝の対立に繋がってくるのです。

さらに、我々が注意しなければならないことは、後白河法皇の大天狗ぶりです。

保元の乱・平治の乱をみても、朝廷が武士の力を利用することなしに維持されることは困難になってきています。いままでは、顎で使っていた武士が台頭してきて、無視できない存在になっているのです。法皇は、それを不快に思うと共に、武士の支配が現実になることに危機感を感じています。平家の最盛期に、清盛は法皇を鳥羽殿に押し込め、摂政、太政大臣をはじめ法皇の側近の官位を奪って、平家一門に与えました。二位が二人、三位が四人、四位が九人、五位にいたっては数え切れないといった具合です。

法皇はその対策として、武士同士を対決させることによってその力を削ごうとしきりに画策しているのです。

例えば、頼朝さまが挙兵したことに對して、平家が追討軍を出すに當っては、法皇が院旨を出しています。その院旨があれば、平家軍は官軍になり、頼朝軍は賊軍になってしまうのです。しかし、平家の追討軍の出陣が遅れたために、平家の総大将維盛率いる数万騎が富士川まで到着した頃には、頼朝軍は二十万騎の大軍に膨れ上がっていました」

「頼朝軍は東岸に、維盛軍は西岸に位置しました。維盛軍は、兵糧にも事欠き、兵も寄せ集めで士気も乏しく、脱走者も出る始末でした」

三善が大江と顔を見合わせながら話に加わる。

「そして、維盛軍が富士川の流が急なため翌日の合戦はないものと思いきみ、遊女などとだらしなく眠っていると突然富士川の水鳥が一斉に飛び上がりました。その爆発するような羽音を夜襲と勘違いした維盛軍の兵士は慌てて逃げ惑い大混乱に陥りました」

「それを見て、維盛も撤退を決意し、総崩れとなりました。翌日、頼朝軍が西岸に行くと、弓矢・刀・甲冑が散乱し、後は、残された馬や遊女の死骸などがあつたほか、兵は誰一人居なかったとか」

二人は、また、顔を合わせて微笑んだ。

「維盛が京に逃げ戻った時には、僅か十騎程度だったというから惨敗もいいところだ」

「この富士川の合戦を境にして、平家と源氏の力関係が変わったといえるな。

特に、その数ヵ月後に清盛が熱病で死んでしまったからなおさらだ。なんでも、清盛は、死ぬ間際に「頼朝の首をわしの墓の前に供えてくれ」と遺言したそうだ。清盛が死んだことで、将来の鎌倉幕府創設の道筋がはっきり見えてきた」

「その通りだ。ただ、その後、木曾義仲もよく貢献してくれた。いい意味でも悪い意味でもね」

二人は、ははははと可笑しそうに笑った。

「頼朝さまが、総崩れとなった維盛軍を追撃せず、鎌倉に引き返すに当っては随分悩まれたそうだ。この追撃の絶好の機会を逃せば維盛が都に帰って再び体制を立て直す恐れがあったからな。だが、頼朝さまが、心配されたのは奥州藤原氏の十七万騎だ。頼朝さまが、鎌倉を不在にすれば、奥州藤原氏に鎌倉を乗っ取られる恐れがある。追撃しなかったのはそのためだ。

だから、実際に大規模な追討軍を再編成した維盛軍を、義仲が北陸道の砺波山で撃破してくれたのは有難かった」

「これは、効果があつた。これで平家はすっかり腰砕けとなった」

「清盛の後を継いだ総大将の宗盛は、気が小さい男で、義仲が、京に進軍してくると聞くと、戦う素振りも見せずに直ぐに安徳天皇を奉じて、三種の神器を抱え、平家一門は都を捨て福原に落ちたが、その際に、六波羅、西八条の豪華な大邸宅群に火を放った」

「あの都落ちは惨めだった。それまで、権勢を誇っていたから、余計哀れだった。しかし、我々官吏を含めて都の誰も、いい気味だと思つたが、同情はしなかつたな」

「一般庶民は手を叩いて喜んでいたよ」

二人は、郷子の居るのも忘れたように夢中になって話している。

「義仲が、京に凱旋した時は、蓮花王院御所で法皇に謁見し、旭将軍と呼ばれて、大歓迎されたが、義仲軍の兵士がすぐに都で食料や衣類を略奪し、また強姦などを始めたものだから、たちまち鼻つまみ者になった」

「そこで、法皇は義仲を都から追い出すために、義仲に平家追討の宣旨を出した。これで、義仲軍は官軍で、平家は逆賊ということになった。義仲が福原に進軍して都からいなくなると、法皇は今度は頼朝さまに宣旨を出した。義仲を撃てというのだ。これで、頼朝軍が官軍になり、義仲軍が賊軍になった」

「法皇の変わり身の速さは驚くべきものだが、義仲のおかげで、頼朝軍は官軍になった。その上、義仲は、福原で平家に負けて都を逃げ出し、さらに宇治川で義経軍に負けて殺されてしまう」

「その上、頼朝さまが義仲討伐の宣旨を受ける条件として、土地支配権を要求したら、法皇はそれを認めてくれた」

「義仲には、感謝しなくてはならないな」

二人は、また、はははと笑う。

（この二人は、まるで、子供が双六遊びに夢中になっているように自分達の思いどおりに鎌倉幕府の創設が一步一步着実に進んでいるのが嬉しいに違いない）

大江は郷子を見つめた。

「どうです、お分かりになりましたか。後白河法皇が宣旨を融通無碍に出して、どのように武士同士を争わせているか。ですから、義経殿が都で法皇を守護しているいま、頼朝さまから、法皇に対して次の申し入れをし、承認を得ました。

一、平家追討の事、機内の武士は、全て義経の指揮下に入るよう仰下されたい。

二、将士の恩賞の事、頼朝が全て決定して後日申請いたします。

二が特に重要で、これは朝廷から鎌倉政権を独立させ、武士集団の統一と一体化を図るためのものです。

法皇が鎌倉に相談することなく勝手に恩賞を与え、その恩賞に差を付ける事によって、武士に仲違いさせる途を禁じるためです。この件は、義経殿にも予め伝えられています。

ところが、義経殿はこれに違反してしまいました」

「それで頼朝さまは、激怒されています」

二人は、深刻な顔になった。

（これまで、呆れるほど長々と話してきたが、結局は、是が言いたかったのだ）

「ごく最近、義経殿は法皇から、六位の左衛門少尉として、檢非違使に命じられたのです。これは、京都守護の職務で、警察権を行使できます」

「そして、この宣旨を頼朝さまの許可なく受けてしまったのです」

「命令違反であることは明らかです」

「さらに、法皇は、その後直ぐに義経殿を六位から従五位下の大夫尉に出世させたのです。檢非違使の大夫尉というのは、通称[判官]と呼ばれますから、義経殿は、[源の判官義経]となりました。従五位下は昇殿を許されますから、義経殿は、殿上人と呼ばれる宮廷人に加えられたのです」

「いいですか、従来頼朝さまの官位は、従五位下の右兵衛佐でした。それでいまでも佐殿

と呼ばれたりします。義仲討伐後、その功によって、法皇から正四位下に叙するという院旨が届きました。頼朝さまが、上級の官位をなにも求めていなかったのにもかかわらずです。その時点では、法皇は頼朝さまに顎で使える武士団の棟梁になることを期待されていたのでしょう。しかし、その後、頼朝さまが、朝廷から鎌倉政権を独立させ幕府の創設をもくろんでいることが判ってきたのです。次第に警戒感を高めてきました。それで、頼朝さまが恩賞を申請していない義経殿に頼朝さまの許可なく従五位下の檢非違使を任命して、頼朝さまを牽制しているのです」

「大天狗が、頼朝さまの鎌倉政権と義経殿との間を官位を使って仲たがいさせようとしていることは明らかではありませんか」

「残念ながら義経殿は、こういった政治的な裏の駆け引きには全く無知と言っていいでしょう。だから、我々の心配をよそに法皇から官位を受けて無邪気に喜んでいるのですよ」

「そうは思いませんか」

大江が、郷子に訊く。

「・・・・・・・・」

郷子は、何も答えられなかった。しかし、義経が、鎌倉政権内で浮き上がっているのは確かのようにだった。

「鎌倉政権は、頼朝さまを棟梁として崇拜し、その下で一致団結しようとしています。ここ鎌倉では、この考えは頼朝さまと豪族との間の主従関係という形で既に確立されています。

一方、義経殿は、単に棟梁の弟君というだけで、政権内で個人的に独立した権威を持つものではありません。都に派遣されているのも頼朝さまの代官としての立場にすぎません。大將軍に任命されてたといっても、その部下の侍大将も軍兵も頼朝さまの管轄下にありません。頼朝さまあつての義経殿なのです。

しかし、都では、義経殿は法皇の信任も厚く、戦上手の英雄で、都の人々の人気も格段に高い。その上、この度、従五位下の判官という殿上人の官位も得られました。都では、頼朝さまよりも、義経さまの方がよく知られているでしょう。それで、心配なのは法皇の口車に乗って、いつ何時、義経殿が自分の方が頼朝さまより、上位だと思いかねない事なのです。ですから、あなたが正室に入ったら、義経殿が間違った方向に行かないように監視して欲しいのです」

「それは、私に義経さまがどのように考え、どのような行動をとられているか、鎌倉に報告せよという事でしょうか」

「それが出来ますか」

大江と三善は、郷子をじっと見つめた。

「私には出来ません。もし、そのような間諜の仕事をせよということでしたら、この話をお断りをさせていただきます。もし、お断りできないのなら、自害します」

郷子は、間諜などという卑怯なことは絶対に出来なかった。

(そんなことをするくらいなら、死んだほうがましだ)

二人は、顔を見合わせて軽く頷いた。

「貴女には、そのような仕事をももちろん頼みません。ただ、我々の心からの願いは、貴女が義経殿の正室になって、幸せな結婚生活を送って頂きたいだけです。ただ、そのような幸せな生活を送るためには私達の話した内容をよく理解しておいて頂きたいのです。私達は、いまの貴族中心の政治を根本から改革し、武家を中心とした新しい政治体制を創ることを目指しています。そのためには、まず、頂点に立つ棟梁は、強い信念を持って改革をやりとげる鋼の意志とそれを実行するための強大な権限を持つ必要があります。そしてその下で改革を実際に実行する組織として、棟梁を補佐するための企画調整能力のある優秀な参謀と行政能力のある優れた官僚を必要とします。そして、これらの組織は、全体として統一されたゆがみの無い組織でなくてはなりません。また、この改革は、私利私欲のためではなく、国を良くしようという公益奉仕の志をもって、公正・公平な観点に基づいて遂行されなければなりません。そうでなければ、大衆の支持を得られません。しかし、一方こうした、改革を進めるときには、どうしても、それを阻害する要因が必ず出てくるものです。ですからそのような阻害要因が発生しないように予め予防しておかなければなりません。しかし、万一、実際にそのような懸念が現実になってしまった場合には、止むを得ず排除されなければなりません。そうでなければ、改革が成功しないからです。

こうした決定には、情の入り込む余地はありません。理知によって決められなければならないのです。それがどのような非情な結果をもたらすとしてもやりとげられなければならないのです。それが血涙をしばるような孤独な決断であることを我々は知っていますが、頼朝さまはそれがお出来になる方です。」

大江が、厳しい表情でそう言うと二人の長い話は終わった。

郷子は、かすかな寒気を感じた。

(この方達は、学者のような風貌で一見誠実そうに見えるが、実は自分達の論理に合わない人は、平気で切り捨てるような怖い人たちなのではないだろうか。阻害要因とはなんだろうか?)

そして、義経に同情している自分を見出した。

比企谷殿に帰る網代車の中で、志乃が訊いた。

「大江さまは、いま、頼朝さまの懐刀と呼ばれているそうです」

「確かに。最後にはその刀で切られるかと思いました」

「どのようなお話だったのですか」

「義経さまは、戦は上手だが頭が悪くて政治が何であるかを理解していないというような話でした」

「まあ！ 義経さまに嫁ぐ方にそのような話をされたのですか」

「かえって、義経さまに同情してしまいました。それはそれとして、頼朝さまと政子さまが口喧嘩していると、そこに大姫さまが現われました」

「大姫さまが！・・・それで、例の恋文のことを話されたのですか」

「いいえ、密かに私にこの文を渡されました」

郷子は、懐から大姫に貰った小さく折りたたんだ紙片を取り出すと、ひろげて読んだ。

あの方の魂がわたしの中に入ってきました。あの方とわたしは何時までも一緒です。

あなたのおかげで生きる勇気が湧いてきました。ありがとうございました。

第八章 了